

英語授業における ICT 化の取り組み

相原 勝斗志

1. ICT によってもたらされた変化

新型コロナウイルスが世界中に影響を与え始めてから約3年半、タブレット端末が本校全生徒の学習ツールに仲間入りしてから約3年が経過した。生徒の学習を取り巻く環境は劇的な変化を遂げ、AIの進化でさらなる変化の波も押し寄せつつある。ここでは私がここ3年の間に実践してきた取り組みの一部を紹介し、英語授業におけるICTのメリットや、今後私たちが直面する課題について読者の方々との情報共有ができればと思う。

2. リモート授業配信とオンデマンド動画作成

私が現任校へ赴任した2020年4月、新学期が始まったと思いきや、2週間もたないうちに臨時休校になった。生徒は分散登校や時差登校を余儀なくされ日常的な授業ができない日々が続いた。当時2年生のクラス担任だったが、生徒の顔と名前も覚えきれないうちに臨時休校になり、戸惑ったことを覚えている。学年の英語科の先生方と短い準備期間の中で、生徒に与える課題のプリント内容を検討し大慌てで印刷した。「学びを止めない」というのが大前提だった。スピードは平常授業を実施できるときに比べると当然遅くなるし、プリントを与えただけで生徒がひとりで学習できることには限界がある。その頃の本校はClassiがすでに導入されており、全生徒が個人の携帯電話を使って学習の記録をしたり、各教科の先生や担任からの連絡を受信できたりする環境は整っていた。しかし、これは携帯電話を使って授業を受けることは前提としていなかったもので、まず取り組んだのが、英文法の授業(英語表現Iの一部)の動画配信だった。スマホの画面を見てわかるようにするために留意した点は次の通りである。

まず、教員の顔出しはなし、小中学校の休校中の配信であれば(生徒と教員がコミュニケーションを

とるために)先生の顔が見えているほうが生徒の安心感が高まるそうだが、私が優先したのは、「画面に分かりやすい文字や説明が出てきて、そこに理解しやすい音声流れること」だったので、画面に教師の顔を出さない選択をした。使うのは全てパワーポイントのスライドで、そこに録音の音声を加えたものを作成した。小さめのフォントは一切使用せず、スマホのスクリーンのサイズに分かりやすい授業が届けられるように配慮した。英文法のレッスンだったので、初めに導入、文法のポイントの説明、練習問題という流れで構成した。音声は全て英語、ただし、画面に出てくる例文や説明の中には日本語も使用しており、英語だけ聞いてもわからない生徒が理解を深められるように工夫した。動画を生徒に配信した後、それを確実に視聴したかを確かめるために「見ましたシート」というワークシートをプリントで配布し、学習した内容が定着するように工夫した。オンラインやオンデマンドの教材配信も対面の授業と同じで生徒の理解を確かめながら進めていく必要があるが、こちらから生徒の表情が見えない状況ではこのようなフォローアップのひと工夫が対面の授業よりさらに大切になると考えられる。1回の動画の長さにも配慮した。長時間の動画を見続けるのは生徒にとって集中力を必要とする大変な作業であると考え、「1本の動画は10分以内」、「1本につきポイント1つ」を目標に作成した。日頃の授業に比べると動画の作成は手間のかかる準備であったが、学びを止めないために他の選択肢はなかった。スタートはこのような感じだったが、翌年にタブレット端末の使用が始まり、教材作成のノウハウが蓄積されてくると配信方法のバリエーションやオンデマンドとオンラインの使い分けなどもより洗練されていった。

これまでに作成した動画のほとんどはYouTubeで限定配信し、生徒たちがスマホでもタブレットで

も視聴できるようにしている。内容は、授業で使用した教材の(授業では十分な時間を確保して解説していない)英文法解説、授業の復習動画、校内実力テストのポイント解説、夏休みや冬休み期間中の課外授業(長文読解講座)、英検の2次面接対策動画、短い読解教材の解説、英文法のポイント解説ショート動画、など多岐にわたる。また、突発的に感染症や悪天候の影響などで臨時休校になったときの授業を補うものとしても積極的に活用した。

3. 自動採点化された英単語テスト

全校生徒にタブレット端末が配布されて間もなく、Microsoft社のTeamsのFormsを活用してそれまで紙媒体で実施していた英単語テストをタブレットとの併用で実施する試みを始めた(長崎県の公立高校は全ての学校でTeamsを導入している)。以前から本校では月に1回強のペースで、1回につき100題を出題する英単語テストを実施していた。毎回の出題範囲が100語、出題される問題も100題、つまり範囲の単語全部を書かせる形式だった。タブレットとの併用を始めたときからその一部を変更して、4択式の選択問題を3割から4割程度、残りは単語を筆記で解答するフォーマットに変更した。4択問題は全てタブレット入力による解答、残された記述問題の一部はタブレットに入力、その他は従来通り紙で解答する形にした。最初は100題全てをタブレットで実施したこともあった。導入初期に生じた問題として、①通信環境が原因で全員がタブレットで解答できないケースがあったこと(このトラブルは現在は解消済み)、②キーボード入力の遅い生徒の負担が大きかったこと、などがあった。多少のトラブルや不都合があっても、1人100題、6クラス(約240名)分の採点時間が自動採点のおかげで大幅に短縮されたことや、正答率や誤答例の統計が一瞬にしてグラフや数値で表示されるのは非常にありがたかった。ところが、何回か同じような単語テストを繰り返すにつれて、課題も見えてきた。100パーセントタブレットで解答させているときには、手書きの生徒の答案を採点しているときに私たちに伝わってくる「生徒の悲鳴・つまずき」が伝わってこないのだ。紙媒体の小テストを採点しながら、私たちは常日頃、生徒がどのようなところで間違いを犯しているかを確認しながら、次の授業で生徒に役立つ

アドバイスを見つけていることがある。単語のテストなら、同じ誤答でも、「単語は覚えていたのに、活用のケアレスミス」で失点するのと、そもそもの準備不足でまったく書けないのでは、間違いの質が異なる。生徒がその単語を覚えるときに「声に出して、音読しながら」習得しようとしたのか否かが、間違え方を見てわかることもある。単純な単語テストでさえ、私たちは生徒の答案からたくさんのヒントをもらっているが、ICT化が進むことで逆に見えにくくなる部分もあるのだ。別の問題として「キーボード入力の遅い生徒の負担」について先に触れたが、「これも今どきの教師が生徒に身につけさせるべき力なのか？」と考えたこともある。私たちは何の教科の担当者であろうと、生徒たちがこれからの時代を生き抜くためにテクノロジーを使いこなしていけるように育てなければならないのなら、英語の授業でもその一端を担って、キーボード入力の遅い生徒が少しでも練習して素早く入力できるようになるための手助けをしないといけないのかもしれない。

4. タブレットによる音読課題

私がかれこれ20年足らずの間、自分の授業の中で意識的にたくさんの時間を割いて生徒に取り組ませてきたことの一つに「音読」の活動がある。「教科書がスラスラ上手に読めると楽しい」というのは英語学習者であれば誰もが経験したことのある成功体験だと思うし、この音読こそがさらに難易度の高いスピーキング活動へ発展していくための土台になるものであると信じている。

実践してきた音読は、まず学習した教科書の本文を生徒が教師の後に続いて、またはひと昔前だったらCDの音源に続いて、今だったらQRコードでアクセスし、タブレットやスマホ端末、またはクラウド上に保存されている音源を聞きながら、とにかく真似してみるというところから始まって、虫食い状態の同じ本文を見ながら繰り返し音読、リピート、シャドウイング、オーバーラッピングなど、少しずつ目先を変えながらとにかく同じ内容を何度も口からスムーズに出てくるようになるまで練習する、というのが基本の流れであった。レッスンによっては、本文がある程度インプットされたら、それを使ってリテリング、または内容に関する意見を英語で話し合ったりしながら、とにかく「習った英語

を使ってたくさん話す」ことを実践してきた。音読活動の締めくくりは「音読テスト」といって、決められたレッスンや、パートの「(日本語)フレーズ訳」を見ながら決められた時間内でどれくらいスラスラそのパートの英文が言えるか」を評価してきた。英語が得意な生徒もそうでない生徒も音読テストのときには必死になって何度も英文を練習する。各レッスンの終わりに1時間使って全生徒が担当者と対面で音読テストを行ってきた。必死になって教科書の英文を暗唱できるぐらいまで繰り返し声に出して読む作業は、生徒が「口にしたことのある英語」を増やす効果的な活動であると思う。

このような音読活動もタブレット端末の導入で新しい取り組みができるようになった。AIが生徒の音読を評価できるようになったのである。これもTeamsの機能の一部であるが、「課題」→「音読の練習」という機能を活用することによって、ワード文書やPDFで読み込んだ文を生徒が端末の画面を見ながら音読すると、1分間に読んだ語数の計測、それぞれの単語を正しく発音できているかの評価、読み飛ばしや読み間違えの評価、などをAIがやってくれるというものである。この機能を活用して、教科書の音読活動をタブレット端末も使いながらあれこれ試行錯誤しているうちにICT化を進めることによって生じるメリット、デメリットが見えてきた。音読テストを対面で実施するときは教師と対面で1対1なので、生徒は緊張感の中で音読することになる。同じ内容をタブレットに向かって音読するだけなら生徒は(おそらく)教師と相対しているときほどは緊張しない。よりリラックスした状況で音読できることが望ましいと考えるならタブレット端末のほうが好ましいが、教師と1対1で発表するという「緊張感」の経験が生徒の成長のために必要だと考えるのなら、これはデメリットなのかもしれない。

同じく、緊張感という観点で比較した場合、対面の音読テストのとき、生徒は「絶対に失敗したくない」という気持ちがより強く、多少失敗しても何回もやり直しができるタブレット端末の音読課題に比べて、練習する音読の回数が多くなる傾向にある。音読活動の目的は「できるだけ多く反復することによって、いい英文をたくさんインプットする」ことでもあるので、この点では対面の音読テストの方が高い割合で目標を達成できることになる。さらに、

この活動に費やす時間について考えると、レッスンが終わるごとに「音読テスト」に費やしていた1時間という時間は、対面の音読テストを実施せずにタブレットの音読課題の提出だけで済ませてしまえば節約できることになる。その一方で、音読課題をタブレットで提出させているときは、授業の時間外で生徒がタブレット端末に録音して提出した音声を評価することになる。AIが測定した音読のスピードや正確さを確認することに加えて、一人一人の音読を耳で確認するとなるとそれなりの時間を費やすことになる。このように対面の音読テストとタブレット端末を活用した音読の評価にはそれぞれ一長一短があり、試行錯誤の結果、現在は両方のやり方をどちらも残したまま、レッスンに応じて対面の音読テストを実施したり、タブレットで音読課題を提出させたりするようにしている。そして、既述の音読に関する取り組みは、育てたい英語の力全体の中において、「話す力の基礎」を培うのが目的なので、もっと応用度の高い話す力は、授業の他の活動の中で「発表の英語」と「やりとりの英語」をバランスよく伸ばしていくことを考えながら育てていかなければならない。

5. 授業における音読活動

Microsoft社のワードやエクセル、パワーポイントには「イマーシブリーダー」という機能が備わっていて、画面上のあらゆるテキストを音読再生してくれる。もともと読み書きが不自由な方のために開発された機能であるが、テキストを音声にして読んでもくれる機能は英語の授業においても絶大な効果を発揮する。

TeamsのClass Notebookというソフトと「イマーシブリーダー」を組み合わせると、表示される教科書の英文をAIに音読してもらったり、英語から日本語に翻訳してもらったりする機能を授業で役立てることができる。

例えば、手元に音源がない英文の音読を「イマーシブリーダー」に行ってもらうことで、生徒にモデルリーディングを聞かせることが可能になり、これを使って教科書以外のあらゆる英文を音読活動に取り入れることが可能になる。「イマーシブリーダー」の音声は男性、女性のそれぞれの声の選択ができる。また、音声のスピードを調整することが可能なので

変化に富んだ音声を聞くことができる)。これを使って、リピーティングやシャドウイングなどの音読の基礎練習を行うことができる。

さらに、「イマーシブリーダー」には100を超える言語の翻訳機能が備わっているため、例えばテキスト入力されている英文を日本語に訳してくれたり、入力されている英文をスラッシュで区切ってあれば、そのスラッシュごとの日本語訳をしてくれたりする。

この機能を利用した活動例の1つ「サイトトランスレーション」を紹介する。

- ①スラッシュで区切られた教科書本文の英文をクラス全員が一斉に見られるように投影する。
- ②「イマーシブリーダー」を使って英文の音声を聞かせる。
- ③音声を聞きながら生徒は英文の日本語訳を言う。(音声から遅れないように。)

この活動は音声のスピードを変えることで難易度を自由に変えることができる。また、既習の英文を使えば、それを定着させるための復習の活動になるが、使用する題材を初見で少し易しめの英文にすれば生徒にとって意欲の高まる、しかも頭をフル回転させて英文の意味を考えたり、それを口から出そうとする(同時通訳者を目指す人たちが行うような)トレーニングになる。イマーシブリーダーを活用した授業は私たちのさじ加減次第でさまざまな発展の可能性を秘めていると思う。

6. ICT化で学んだことと今後の課題

新型コロナウイルスの影響でそれまでできていた普通の授業ができなくなり、さらにICT化の加速で英語教育のさまざまな局面が変化し始めて、改めて感じたことが一つある。それは、生徒が学び続けるためには「動機付け」が非常に重要であるということである。生徒が教室で授業を受けずに自宅でタブレット端末越しに学習するようになると、教室では簡単にできていたさまざまなことが困難になった。プリントを配布するのも、教師の説明がどれくらい理解できているか表情を見ながら反応を確かめることも、教師の後に付けて音読させることも、生徒に指名して発表させることも、隣に座っている友達と意見交換を求めることも、全て手間がかかるようになった。その中でいちばん難しいと感じたことは、「まずタブレットの前に座って、学習の準備をさせ

ること」である。生徒の学習へのモチベーションを保つことは思っていたよりはるかに難しく、自宅でタブレットを使用することが習慣化していない生徒にオンラインで授業を受けさせ、そのような生徒と課題のやり取りをするのは慣れるまでにそれなりの労力を要した。日頃から高いモチベーションで学習できている生徒は対面の授業でもオンラインの授業でも同様に意欲的に取り組むが、これは全ての生徒に当てはまるわけではなかった。Digital Divide(情報格差)という言葉があるが、タブレット端末や新しいテクノロジーを受け入れやすい生徒とそうでない生徒の間には格差があることを強く感じた。そしてその格差を埋めていくのもこれからの教師に求められる役割であると思う。日頃から学習意欲を高めるための仕掛けをあらゆる場面で行っていくことの重要性を再認識できた。また、例えばオンラインで授業を配信する経験を通して、授業中に行われているさまざまな活動の性質を細かく分類してオンラインで実践するための方法を考えることができた。授業中の一つ一つの活動をより活発で有益なものにする手立てを考えることもできた。ICT化の波にもまれながら試行錯誤したことは、単に便利なテクノロジーの習得だけでなく、より質の高い授業を考えるためのヒントを数多く与えてくれた。ICT化は現在も進行中で、これからもっと便利なソフトやアプリが出てくるだろうし、それらの有効な活用方法を私たちは考え続けていかなくてはならない。最近ではChat GPTに代表される生成AIの台頭が注目されているが、適切な活用法を研究することで、生徒が書いたり話したりする英語の質を高めるのに大きく貢献できる道具になるのではないかと期待している。時代の波にのまれることなく新しいものへ挑戦し続けることで、今までよりさらに楽しい、さらに実りの多い学習ができるようになるはずだ。ここで紹介したいいくつかのアイデアや活動・実践例が読者の皆さんの今後の授業実践に少しでも貢献できればと強く思う。猛烈なスピードで教室にICTの波が押し寄せてきたが、私たちはそれをプラスに捉えて「ではこれを生徒たちのためにいかに有効活用するか?」ということをし、これからも考え続けていきたい。

(長崎県立佐世保西高等学校 教諭)